



横河秋濤著述

開化の入口二編

下

71
3481
2



門ヲ
號 3481
卷 2

昭和十三年
二月六日
購求

横河秋濤述
開化乃入口卷四



播陽 横河秋濤 述

鈍 ハア左^さは^さは^は随^ま分^ん訣^んの^ま分^んつ^て事^{こと}ト^や實^{じつ}
血液^{ちゆうえき}を^か絞^めつ^て染^そ物^{もの}を^かま^るの^てハ^いご^ごと^ぬ
の^しん^し

文 ハテ知^しま^る事^{こと}の^しら^ら太^た政^{せい}官^{くわん}が^せ話^わや^まご^ご
と^いつ^ても^ア々^々穢^けち^らひ^ひ人^{ひと}の^{ちゆうえき}血液^を千^{せん}石^ごも^も万^{まん}

石も運上よ取つてやア一ツ時子腐て始末も終ち
いドウモ愚民と云りのい詰らるゝことを云糶
しとりのめどすゞしく戸籍を厳しく調づ
て女の子を澤山よ引集め北羊よ一て外国
へ渡はと中々云ますをさうさうが日本の女も中
古の如く学問をさせさうさうい紫式部や清少
納言の中々な者ぐ随分出来て外國人も款
しうらでもあらふが近古以来亂世の餘風

をそのまうくも永くの太平が續て田舎の女
い中だく糸を引く機を織く畑の草引
でも仕やせうが都會の女の朝飯が濟と直
様湯をうらむ鼻の先は紅糸を装ひ眉を揃
しとりの頸を抜く御蠶よ纏をたて明ても
暮ても物詣りと芝居行内は居坐ておとく
男を役仕う中々な母親の育る娘の子斗
りどから是まも六七文とり日この仕事ハ

三弦と躍の稽古サ其様を娘斗りを澤山
又外國へ渡してちるハホンニ彼國の人も大
きり迷惑をよるであらふ彼國の女ハ六七
才より女学校へ入門せ男子同様ニ学
習をして後ハ一國の政事も執様ニ仕入
りけり中々無学文盲女大學生一卷も分ら
ない女共が迎へ付逢の出来る訣でいあつま
せんノサ皆是旧弊を妙づつて居る因循

家の悪口いろいろ餘程耳の垢を浚へて聞分
けちるていちるなる事じ

愚フン夫をどの皆下々の訣が分らぬ者が
種々と悪口を作り出して言のかんシ血統
の事ハ先づ其増分つたが二十支より多きは五
尺一寸以上の者を鎮臺とやら言所へ呼出
して軍の稽古をやらせるとやら云事トやぐ
これら何と一と訣柄トやら其色も序よ

委く一くう談たが聞きいいノウ

文ぶんハイ夫そハ徵兵令ちきうへいめいよ委く一く書くて在あり

が序ひらよ平坦へいたんく云いつて聞きせせせせ凡おそ和漢わくわん

古今國の兵制へいせいは種しゆの差別さつべつが在あります

が今度復古こんどふこ一新の御政治ごせいぢとちつてハ中古

以前の御法ごほふよ御定め遊あそむむれ從前そんぜんの武士

をきつてり御廢止ごはいしと相成り六軍管りくぐんかんとい

つて東京仙臺とうきやうせんたい名古屋大坂廣島なごやあひらしま熊本くまもと乃

六ヶ所むつかよ大鎮臺おほちんたいを設たてられ近國きんこくの諸縣しよけん一い分

營の鎮臺ちんたいを置おき御國內ごこく一般華士族いぱんかじぞく平民假

令官いんくわん負おもも家督相續かとくそうぞくの嫡男ちやくなん及び承祖じやうその

孫まご其外病氣いぢやまきよ々柔弱じやくじやく者もの畸者きしや大中學校

の生徒せいとを除のくの外次男げがいなん三男末子さんなんまごよ生なままる者

を六七文むかしより小學校しょうがっこうより學問がくもん美術びじゆつを習まひ

せせ遂つひと上達じやうたつして最早さいぜん大中學校だいちゅうがっこうへ進すすむ者

を格別かくべつ其他通例たうれいの人物じんぶつより小學校しょうがっこう限かぎりの稅ぜい旨

古終りそり書翰の文説と加減乗除の算術が出来きくは十九戈の冬會誼所一屆常備隊の兵籍は加へられ翌年二月十五日より軍醫の診察は預り身幹を度られて五尺一寸以上一分ても脊が延て居まは其より兵部大尉の前へ出て右の書翰の文言を讀まねり美術を試せられり仕やすは是きをを検査と云まはヨと通

りごうらいらり脊が高くて一石の米を振り肩まはりやうなる力強でも書翰も讀めず美術も出来ナイ者や五尺一寸は足り方い者や耳の遠い者や病氣ある者ハ皆除の口で御用は立くても迎といけナイ乃で右の検査が済むと一旦宿元へ下り四月十五日迄は追々鎮臺へ入り込へ大砲隊小銃隊騎馬隊工部隊輜重隊と五手と分ま銘この性質と好

よ從ひ朝の八字く十二時迄夫まくの稽首
古終まば午後の一時く學問算術何なり
とも好む事を稽首古きせて下き色毎日の
給金並よ小使く日曜日には牛肉豚肉種
種の御馳走を賜り四季よは切立のズボン
ミンテルシャツプ番迄も御下け有り其上隨
分精を出して調練が上手よ成り伍長や
司令方よでも見立らまらる様よるれ日

給の外よ月給を賜り猶又藝もよく正直よ
して身持がよけまば近衛隊と云つて立派
な装束を着て天子様の御側よ付廻り五
年が間兵隊の親玉と成て御給金よ去ら
かり當り其まこうく我が器量次第で第一
等正三位の参議よ成らと諸縣の令冬事
よ成らと樂ぶ其様よ出世を志ちくても
右の常備兵三年の間ふても兵隊を好まば

外の司官は望ある者、随分器量次第で典
事大属もども去て下さる。若又そまも出来
ちくして無事は三年を勤め、上は其三年の
日給を積置て二百二三十圓の金子を貰ひ
宿へ下つて商法を始め、事どナント有難
ひ結構な御法で在やせん。今日日傭
働して朝の七ツくら板一枚の小舟は乗り
千尋の海原は綱を曳くり露霜を踏ふ

て肥持をとりといとちくらが樂でどちくらが結
構と思ちるもこの様な有難い思召を
イカニ分らちいとて地獄へでも陥る様は悲
しうつて五月十五日の限日は遍照金剛低
頭平身あやまり入て涙と共に二百七十圓
の代人料を差出は馬鹿野郎の在せうだ
ドウモ氣の毒な物だ子エ
愚成不どろくハテサテせうどあつらうにま

も徴兵令を讀んで見れば若い時うら頻と
讀馴しぬ片假名と角な文字斗りて後
先がぎつたり分らぬケイお寺さんや古
田先生は相談して根うら葉から六ッ
しそらよ言んす斗りて其方のやうよき
らりと訣が分らむとやんシシテ第一後備
隊第二後備隊と申ら又補充隊とやら云
々のいそまははとうたう者トや序よ云てお

呉りやれまゝ

文 サアその第一後備隊と申は右の常備隊
を無事よ三ヶ年勤めて給金を戴き宿へ下つ
て商法を始て居てもすぐ兵籍を脱ぎ
二ヶ年の間は矢張お上の人別で何も勤め
ら無きまども一年よ一兩度鎮臺へ出て訓練
の復習をたると萬一軍役終事が来て
鎮臺の常備隊が追々操出し成り残り少

ちく成ちかとては後詰ごづめの爲め操込くわむ役やくは是
ら非常ひじょうの時斗ときりて減多へんたは有あべき事ことではあ
らまをんノサ次つぎは第二後備隊ごたごいと右の第一
後備を勤めの上又二ヶ年其通りで是きは
後詰ごづめの又後詰ごづめより猶更なほ操出くわす様ようを事ことに
少すくるいノサ又其次つぎは補充隊ふくじゆうと云まはのは
右の二月十五日うら検査けんさよかり一縣の管かん
轄くわよ検査けんさ済さいの者もの乃至五百人あれども其年

鎮臺入營ちんたいにやうの者二百人より事足ことる時ときを先五
百番迄までの籤せんを取らせ其中二百番迄までを鎮
臺たい一ツき二百一番より三百番までを補おぎなえ
隊たいと成なし迹あと二百番を落籤おちせんと云つて軍
役やくを免ゆるし補充隊ふくじゆうの百人は宿元しゆくげんへ下つと
も管轄くわんくわつ内うちを出事しゅつじなす常備じやうびと成なり鎮臺
よ入りたる前の二百人の内よ若わかし病人びやうじん死人しにん
又は脱走だつそうしより去いり者ものが出来できる時ときに

其補充の内より操上げて其抽籤の日より三
年の間常備隊を勤める事然し其補充
の間抽籤の日より翌年の其日迄御沙汰
が無き最早免役と為て居るより管
轄外一旅立してもおうまいる事サ何
分従前の御政治と違ひ少若者共をむ
ぢくくと酒色遊興の為月日を送ら
終は放盪無頼となり喧嘩口論は身

を果し或は梅毒の為は廢物と為り親兄
弟は難義をうける様を悪少年の出来ぬ為
の御政法ダ先づ六七才より学校へ入る文才
有る者ら中学大学へ昇進し武畧は長し
者ら鎮臺へ出て練兵軍學は熟し終は兵
部の大輔より兵部卿へも進ませある結構
を御主意でいしから入才當用くことと漢
學者流が口先で喋くつても此制法を知ら

あるちやア實地の学と云ふもの何分二十
歳より二十六才迄勇氣凛々たる男盛り
下賤なる者ら小角力の一番も取り柔弱なる都
人の遊藝よ身を瘦しませし産業の事よ々
迂濶と暮して居る最中ご其間の一
廉國家の御用よ立様を結構る御法が昔
より有やすり御一新の御時節と成れ
ばこそ是様なる事を見たり聞たりする

様よ成りのサナント親父さん有難ひ事で
は在りせんり子エ

愚 ソウデヤク 謂きを聞て有難や成程人才當
用とは抄りて 訣でござるるウシ文才
ある者ら学校で追々仕上げ武術よ才
あるものも鎮臺で立身する様よ取組ど
御政事トヤノウホンニマア下この者も其様な
訣とは知らぬ僅り一ヶ月よ五錢の入費を

種しゆこと云い諭いしても今いま出いさるはな利あ一つ学校がくこう
とい悪わるい者ものトや白びやく抓とい恐おそとい者ものトや脱だつ肛こうハ
痛いたみののどやあんどと悪わる口くちをぬくし居お
る其上しやう周しゆ旋せん方ほうや助教きやう達だつよ因循いん家けと行は
きめり終とが入い交かうりイヤモウ何處どこの学校がくこうも
喧けん嘩か口くち論ろんが絶めはけホッコリ困て居トヤシシ
今日けふもお寺てらさんが学がく校こうの事よ付段だんと理
窟くつを言きらけれどもトウモ捌方はたは困つて

居いるナント上人じん悴せま共どもや西海かい氏しよ前刺せんくらの
御おん腹はら立たを嘶れたららとうトヤウウ
鈍どんヲ、とましくナント大だい明めい君くん西せい海かい氏し愚ぐ僧そうが
立た腹はらせましひの体のヨウマア聞分わけて下くだぎ
まの始はめて小せう学がく校こう取と立たの御布ふ令れいがあるも
と直様さやま一いつ應おうの挨拶あつもあく天朝てんの嚴命めいト
やサア今日けふ中ちゆうは寺を明渡めいと村役やく人じんや
世せ話わ人じんが寄集あり本堂だうの莊嚴じやうら本尊そん様さまも



卷四



位牌もさつたりと庫裏へ押込おこて襖あきをこ
 づー畳たたみをみんぐり跡あとも残りー古佛具ふるぶつぐや絶
 一も家の多くの位牌いはい其外茶湯ちやとう茶碗ちやわん茶臺ちやたい
 古過去帖こくわこくせう釋伽しゃが誕生たうじんの金佛きんぶつまで廣庭ひろてい持
 出だしきつたりと焼燼やうぜんーを焚火いひで屍しか死
 烘あぶつーりひるよ零落あちぢれーねばると昨日きのうの花はな
 の臺うゑも甘茶あまぢやで行水ぎやうすいをせまーこをアタ
 どうろくな庭先ていせんで火刑ひあぶりの火ひで屍しかあぶる

とはきてもく御痛おんいたもーやと涙なみだちりり
 よ引出ひきだしと身みも悲かなしや如来にがや様さまの真赤ましかよ
 ちつてちつちん御最期ごさいごナント文明君ぶんめいきみ是こゝが
 泣なずよ居おられうりオ、イ、く今日けふの其理そのり非
 をどちららが無理むりトやの區長くちやう殿どのよ聞きひて
 めしひよ来きますーこころのウオ、イ、オ、イ、く

文 オヤマア夫ハ御氣おんいきの毒どく千万せんまんど子エ今度こんど淑
 一新いちじんの改革かいかくハ何事なにごとも悪わるくさ々と其様そのさま小

過劇と成るノサソシテ夫まを何人の焼ま
しころ子エ

鈍 ハイソレ其所よころぎる神職の玉垣氏が惣
大将で皆のめがその指揮を受けと
のドヤンシ

間 コレハ迷惑至極でころぎる其時僕ハ腹
痛が起つて寺の玄関に寐て居と間彼
幹事の高飛長四郎の何事も其事出

ぞやンシ萬一僕が焼ころもせよ最早命
脈の絶し佛法位牌を焼うが佛像を毀
らぐ皆これ天朝の御為ちんを天照大神の
御罰が當つと思ふ堪忍をちするが
上分別ドヤンシ唯のつまでもお主ハ我寺志
やと思ふて居さんすケヤ其様ハ腹が立
し悲しあつしなるのドヤ寺ハ天朝の
寺トヤケイ乃で其寺を天朝の御用よ立て

学校よなるものやシシナント皆様左やうなる
ごまごまぬり可愛きうよ金佛の釋伽如来め
の真赤よ成つてくしくなるた氣味のよき其
火で尻を烘つたら黄色なる煙の鼻へ通つて
甘臭い事であらうと云へり

文 イヤハヤそれら餘り劇烈よ過ぎますやう
然し左様な無益な議論は休せりて先づ
上人や両先生に定めて教師或は助教の拜

命でも成さぬに在やせりが大學中学の
教則は叔置て先づ小学校の教則如何なる
教方が天朝の御主意でござらるこの第一それ
あら承りませう

頑 ハテ夫に知きて事初学入徳之門也と
いれ先大學より始め事もあり又宋
儒の小学と云簡便の全書もあり僕等斗
りではあゝ和漢古今の通法でござらる

文上人いどうだ子エ

鈍愚僧いまづ讀本い弘法大師の實語教

童子教手習いいろはうら初登山手習教

訓書ズツト兄弟子いは玄惠法印の庭訓

往来と云様な者トヤ

文然らむ神主様い何で在まはり子エ

間僕い先つ最初い五十音縦横の働を教次い

てふをは四段の活用をれうら追う上達

らると言の八千岐言靈のあるとその外

讀本も國史畧舊事記古事記と段々

に進んで後には鈴舎平田兩先生の書

を教へまはる何分皇学い兩先生の書

でちけまはる何事も分らぬヤノシシ

愚論まじりく文明英吉が的切の辨解

まじり勤王の一家と謂ふべし此後如何

ちり公論やありそい次篇は詳なり

開化の入口卷四

明治七年五月御免許
同 六月出版

播磨横河秋濤著述

南大組第七區心齋橋筋二丁目

大阪書肆

松邑九兵衛版

